山上憶良「哀世間難住歌」について

――序文と長歌との関連を中心に――

廣川晶輝

一　はじめに

『万葉集』巻五には、左のような、題詞・漢文序文・長歌・反歌の形を採る作品がある。(1)

哀二世間難レ住歌一首并序

易集難レ排八大辛苦　難レ遂易レ盡百年賞樂　古人所レ歎今亦及レ之　所以因作二一章之歌一　以撥二二毛之歎一　其歌曰

世間の　すべなきものは　年月は　流るるごとし　とり続き　追ひ来るものは
百種に　逼め寄り来る　娘子らが　娘子さびすと　韓玉を　手本に巻かし　或有二此句一
云「白たへの袖振り交し紅の赤裳裾引き」　同年児らと　手携はりて　遊びけむ　時の盛りを　留みかね　過ぐし遣りつれ　蜷の腸　か黒き髪に　いつの間か　霜の降りけむ　紅の
一云「丹のほなす」　面の上に　いづくゆか　皺が来りし　一云「常なりし笑まひ眉引き咲く花のうつろひにけり世間は かくのみしなら」　ますらをの　男さびすと　剣大刀　腰に取り佩き　さつ弓を　手握り持ちて
赤駒に　倭文鞍うち置き　這ひ乗りて　遊びあるきし　世間や　常にありける
娘子らが　さ寝す板戸を　押し開き　い辿り寄りて　真玉手の　玉手さし交へ
さ寝し夜の　いくだもあらねば　手束杖　腰にたがねて　か行けば　人に厭はえ
かく行けば　人に憎まえ　老よし男は　かくのみならし　たまきはる　命惜しけ
ど　せむすべもなし（5・八〇四）

反歌

常盤なす　かくしもがもと　思へども　世の事なれば　留みかねつも（八〇五）

右の作品を「哀世間難住歌」と呼び、考察を加えたい。

ところで、右の八〇五番歌の後ろには、

神龜五年七月廿一日於二嘉摩郡一撰定　筑前國守山上憶良

という左注があり、そのことにより、右の作品が山上憶良の手になるものであることが解るのだが、この左注は、「令反或情歌」（題詞・漢文序文・長歌八〇〇番歌・反歌八〇一番歌）、「思子等歌」（題詞・漢文序文・長歌八〇二番歌・反歌八〇三番歌）、そして、この「哀世間難住歌」という一連の作品、いわゆる「嘉摩三部作」全体に付けられている左注である。「哀世間難住歌」を論じる本稿としてはあえてこの左注を取り上げないこととし、「嘉摩三部作」全体を論ずる稿を執筆する折りに論の対象とすることとしたい。

右に見るように、山上憶良作の「哀世間難住歌」では、題詞・漢文序文・長歌・反歌の形が採られている。漢文序文を伴わない単なる長歌作品においては決して生じることのない、漢文序文と長歌との関係が、当該作品においては生じることとなる。そして、そこに、単なる長歌作品の方法とは異なる方法の存在を指摘することができよう。

土屋文明氏『旅人と憶良』は早くに、

……漢文の序を附したのは、文章と歌詞とによつて効果を強めようとした憶良

の発明で勿論漢文の法を輸入したのであらう。

と指摘していた。[2] 本稿は、序文の表現と長歌の表現との関連によってもたらされる表現効果の一端を明らかにすることとしたい。

そのために、まず、この作品の構造を理解する上での重要な先行研究の指摘を確認しておこう。

『万葉集総釈』（森本治吉氏担当）は、長歌冒頭部分の構造について、次のように図示しており、長歌のここまでを、「以上概論的に述べた」と記している。

世の中の術なきものは
(1)「年月」は流るる如し。
(2)「とり続き追ひ来るもの」は百種に迫め寄り来る。

また、大久保廣行氏も、右の『総釈』と同様の構造理解を示した上で、

序文とのつながりから言えば、前者（右の『総釈』の指摘するところの(1)の部分こと。廣川注）は「遂ぐること難く尽くること易き」「百年の賞楽」を示したものであり、後者（右の『総釈』の指摘するところの(2)の部分こと。廣川注）は「集まること易く排ふこと難き」「八大の辛苦」に相当する。

と述べている。[3] つまり、序文と長歌の構造理解を明瞭に示しているわけである。

本稿としても、構造理解として、右の森本治吉氏『総釈』、大久保廣行氏の見解に賛同する。本稿は、序文・長歌の表現の分析に立脚して、序文の表現と長歌の表現との関連によってもたらされる表現効果を明らかにすることを目指したい。

ところで、長い当該作品全体を満遍なく論じることは、ともすると論点が散漫となり、冗漫との誹りを受けかねないであろう。そこで、本稿としては、『総釈』が図示するところの「(2)」、大久保論文が指摘するところの「後者」に、あえて絞り込んで論じることで、右の誹りを免れようと思う。また、絞り込んで論じることにより、より端的な形で、序文の表現と長歌の表現との関連によってもたらされる表現効果を明らかにすることができるのではないかと考える。

このような目的を持つ本稿は、次の第二章で「易レ集難レ排八大辛苦」について考察し、続く第三章で長歌冒頭部分の「とり続き　追ひ来るものは　百種に　逼め寄り来る」について考察することとする。

二　序文の「易レ集難レ排八大辛苦」について

（一）「集」をめぐって

当該序文では、「集まり易くして排ひ難きは八大辛苦、遂げ難くして盡くし易きは百年の賞樂」ということが「古人の歎き」として取り上げられるが、それは「古人」だけの問題ではなく、「今またこれに及ぶ」というように、この歎きが作品上の「現代（「今」）」にも共通の歎きであることが、まず、示される。

この「易レ集難レ排八大辛苦」という序文冒頭の表現によって、どのような「様相」[4] が作品上で喚起されるのか。従来の研究においては、この表現を概念的に捉える傾向が強かった。そのため、残念ながら、「易レ集難レ排八大辛苦」という序文冒頭の表現によって、どのような「様相」が作品上で喚起されるのか、という点を掘り下げて論じることが足りなかったようである。

そこでまずは「集」について追究しよう。

『万葉集』中の「集」には、

同月十一日登二活道岡一集二一株松下一飲歌二首（6・一〇四二～一〇四三題詞）

右一首歌者　正月二日守舘集宴……（19・四二二九左注）

のような、計数可能の範囲の数人が集まる意の例がある。第一例の「同月」は春正月であり、初春とは言えまだ肌寒い正月十一日に、一本の松の木の下に王族（一〇四二番歌は市原王の作）と貴族（一〇四三番歌は大伴家持の作）の数人が集まっての例であることが解る。第二例は、正月二日に越中国守大伴家持の館に、国司たちが集まっての宴の例であり、国府の官人の定員が十名程度であることを考えてみても、計数可能の数人が集まっての例であることが解る。

一方、『万葉集』中の「集」の用例には、計数不可能な、もしくは、あえて計数を慮外に置くような、次の例もある。[5]

……一書是時宮前在二二樹木一　此之二樹斑鳩比米二鳥大集　時勅多挂二稲穂一而養レ之　乃作歌云〻……（1・五～六左注）

禍故重疊　凶問累集……（5・七九三序文、大伴旅人）

……無レ福至甚惣集二于我一……（5・山上憶良「沈痾自哀文」）

葦鴨の　多集（すだく）池水　溢るとも……（11・二八三三）

第一例は、「斑鳩」と「比米」の二種類の鳥が数えきれないほどたくさん集まっているという例である。第二例は、凶事の報せ・訃報が連なって次々に集まってくることを表わす例である。第三例は、「無レ福」（すなわち不幸）の中でも最も不幸なものが全て自分に集まってくることを表わす例である。第四例は、「多集」で「すだく」と訓ませた歌の用例である。葦鴨の群れが池の水面にびっしりと無数に集まり浮んでいることを表わす用例である。

これらの例にはそれぞれ、傍線部の「大」「累」「惣」「多」など、数の多いことを表す字が近接する。その字が明瞭に表すように、計数できない（もしくは計数自体を慮外に置く）ほどに多数のものが群がり集まっていることを表わす用例であると言えよう。

ところで、計数できないほどに多数であることを表す、そうした「大」「累」「惣」「多」などの字が付けられていなくても、「集」の字自体が、計数できないほどに多数であることを前提として用いられている例もある。

天地の　初めの時の　ひさかたの　天の河原に　八百万　千万神の　神集（かむつどひ）集ひいまして　神はかり　はかりし時に……（2・一六七、柿本人麻呂「日並皇子挽歌」）

かけまくも　あやに恐し　我が大君　皇子の尊　もののふの　八十伴の男を召集聚（めしつどへ）率ひたまひ……（3・四七八、大伴家持「安積皇子挽歌」）

第一例が、天上界で「八百万」「千万」の神々が集まったと歌う例であっても、この歌が八百万、千万という、神々の数を数えることを目的としている歌でないことは言うまでもない。計数できないほどに多数の神々が集まって天上界を覆い尽くしている様相がここにはあると言えよう。第二例は、安積皇子が多くの氏族の男たちを率いているさまを歌っている例である。この例でも「八十伴の男」という表現が八十の氏族の男というように計数を目的としているのでないことは言うまでもなかろう。「皇子の尊」というように、無理にでも尊称を付けて尊びたいという作中に込められている願いと呼応して、この歌では、おびただしい数の氏族の男たちが皇子にお仕えし、皇子はそれらの男たちを率いている、そうした颯爽とした姿を描出することに主眼があるのである。[6]

右の二例を見るに、『万葉集』中の「集」には、計数できないほど多数のものがびっしりと集まり存在している「様相」が含まれていることを見出すことができよう。

『万葉集』中の「集」について論じてきたところで、「集」の字義についても確認しておこう。「集」の本字は、『説文解字』[7]（四篇上）に、

𩦎　羣鳥在木上也。……集𩦎或省。

とあるように、「𩦎」である。「𩦎」「集」両字については、『篆隷万象名義』[8]（第六帖七四オ）に、

𩦎　集字

とあり、観智院本『類聚名義抄』（僧中六十九オ）[9]に、

集……𩦎同

とある。つまり、「集」自体には、「𩦎」が表すように多くの鳥が群がっている意味が本然から備わっているのであり、ひいては、計数できないほどに多数のものが集まっている様相を表わすのに、きわめて適った字であると言えよう。

当該序文の「易レ集」の「集」に対して従来の諸注釈書が記すのは、「あつまる」という記述のみであり、それ以上に述べることは無かった。本稿としては、『万葉集』の用例、および、「集」の本字が「𩦎」であることにより、計数できないほどに多数のものがびっしりと集まっているという様相を看取することができるということを指摘しておきたい。

当該作品において、「易レ集」「難レ排」（次節参照）であるのは、「八大辛苦」であると述べられている。この「八大辛苦」が仏教語であることを考えれば、この「集」についても、仏教語としての意味を視野に入れておく必要性もまたあるであろう。

『岩波　仏教辞典』[10]は、「集　じゅう」の項目を設け、

原義は，集まり合わさること．仏教では，衆生の〈苦〉（duḥkha）もしくは〈苦〉を本質とする衆生の生存は，無明（avidyā, 無知）ないし愛（tṛṣṇā,

妄執（もうじゅう）などの，もろもろの因縁（いんねん）が集まり合わさった結果であると説く（四諦（したい）の中の集諦（じったい））が，このように因縁が集まり合わさって，結果を生起することを〈集〉という．

と説明する。こうした仏教語としての側面を加味しても、これまで述べてきた「集」が喚起する様相の考察とは齟齬を来たさず、また、齟齬を来たさないばかりか、単に「あつまる」とのみ概念的に捉えてきたこれまでの研究のあり方を修正することに作用すると言えよう。

（二）「排」をめぐって

序文では、右に見た「易レ集」に続いて、「難レ排」とある。びっしりと集まっているのを「排」することが困難であるというのである。では、その「排」とはどのような意味を帯びているのであろうか。次にはこの点を確認したい。

ここでは、上代の用例として、『日本書紀』の用例を見てみよう。[11] 神代下第九段一書第一には、

……時に此の神の形貌、自づからに天稚彦と恰然相似れり。故、天稚彦が妻子等見て喜びて曰く、「吾が君猶し在しましけり」といひ、則ち衣帯に攀持り、不レ可二排離一。……

とある。亡くなった天稚彦の妻子が、味耜高彦根神の帯に取りすがり、押し離そうにも離れずにまとわりついている、そうした様相が示されている。当該作品序文の「難レ排」を考える上で、この「不レ可二排離一」は、ともに「難」「不可」と、困難・不可能の語を伴っている点から、参考になろう。この例を参考にすれば、当該歌の「難レ排」も、押し離そうにも離れずにまとわりつく、そうした様相が示されていることになろう。

また、『日本書紀』武烈天皇即位前紀には、

……果して期りし所に之きて、歌場の衆に立たして、歌場、此には宇多我岐と云ふ。影媛が袖を執へて、躑躅して従容したまふ。俄くありて鮪臣来りて、排下太子与二影媛一間上立。是に由りて、太子、影媛が袖を放ち、移り廻り前に向みて立ちたまひ、直に鮪に当ひて、歌して曰はく、……

とある。歌垣の場において皇太子は、娶ろうと思う影媛の袖をつかんでしきりに誘っている。そこに登場するのが恋敵の鮪臣（しびのおみ）であった。鮪は皇太子と影媛の間に割って入り、二人を遠ざけようと押し退けた。その結果、皇太子はつかんでいた影媛の袖を離すことになった、という例である。この例でも、「排」が、遠ざけようと押し退ける意を表している。

また、『類聚名義抄』（観智院本、仏下本三十六ウ）[12] には、

排　ハラフ

とあり、鴻巣盛廣氏『万葉集全釈』は当該歌の序文の「排」に対して、

排はハラヒと訓む。押し除ける意である。

と説明している。

さて、当該作品序文の「難レ排」についてまとめよう。「排」は、「押し離す」「押し退ける」という意味を持つ。そして、「難レ排」は、そうした「排」の動作が困難であると言うのである。

ここで、前節の「集」の分析と合わせて、「易レ集難レ排八大辛苦」を考えよう。前節では、計数できないほどに多数のものがまとわりついていることを確認した。そして、本節では、その計数できないほどに多数のものを押し離し押し退けることが難しいということが確認できた。となれば、まさに、当該序文の「易レ集難レ排八大辛苦」には、計数できないほど多数の八大辛苦がまとわりついている、そうした「様相」が顕わし出されていると言えるであろう。

三　長歌の「とり続き　追ひ来るものは　百種に　逼め寄り来る」について

（一）「セム」をめぐって

「逼め寄り来る」の原文表記は「勢米余利伎多流」である。このうちの「勢米」すなわち「セム」を、どのように理解したらよいのであろうか。

『万葉代匠記』（精撰本）では、

責寄リ来ルト承ル意、怨賊等ノ追ヒ来テセマル譬ヲ含メリ。

と述べており、「セム」に「攻撃する」意を見ている。この説には、現代の注釈書では日本古典文学全集版『万葉集』が立っている。

セムは、追い詰める、攻撃する意。

と述べているとおりである。また、『時代別国語大辞典　上代編』も当該歌を、

ますらをの　高円山に　迫有者（せめたれば）　里に下りける　むささびぞこれ

（6・一〇二八）

という歌と合わせて「②追いたてる。攻めつける。」という項目内に収めている。

一方、『岩波 古語辞典 補訂版』は、この「セム」について、「セシ・セバシ（狭）と同根」という語源解釈を示し、当該歌を「①（相手との）間隔をつめる。迫り近づく。」という意に分類している。

右のうち、いずれの理解が良いのか。

ここでは、『岩波 古語辞典 補訂版』が指摘する「セシ・セバシ（狭）と同根」という語源解釈について考察しよう。その考察において参照すべきは、金田一春彦氏の見解であろう。金田一春彦氏は、

《ある語の第一音節に上声の点がついているならば、その語の派生語および、その語を先部とする複合語は、すべて同様に第一音節に上声の点がついている》

《ある語の第一音節に平声（又は去声）の点がついているならば、その語の派生語、およびその語を先部とする複合語は、すべて同様に第一音節に平声（又は去声）の点がついている》

と指摘し、これを総括して、

《ある語が高く始まるならば、その派生語・複合語もすべて高く始まり、ある語が低く始まるならば、その派生語・複合語もすべて低く始まる》

と指摘している。[13] つまり、アクセントをたよりとして、ある語の語源について見定めようとするのである。

この指摘にならって、「セム」を観智院本『類聚名義抄』において見てみると、

迫　セム〈平上〉（仏上二十八オ）

逼　セム〈平上（平声軽か）〉（仏上三十二ウ）

責　セム〈平平〉（仏下本九ウ）

とある。このように「セム」は平声で始まるわけである。また、図書寮本『類聚名義抄』[14]にも、

謫　セム〈平上〉（八六）

讓　セム〈平上〉（一〇〇）

とある。こちらも、「セム」は平声で始まる。

一方、「セバシ」の方はどうか。観智院本『類聚名義抄』には、

狭　セバシ〈平平上〉（仏下本六十六ウ）

隘　セバシ〈平平上〉（法中二十二ウ）[15]

褊　セバシ〈平平上〉（法中七十一オ）

などとある。「セバシ」の方も、平声で始まるわけである。

この点からも、「セム」を、間隔が狭い意味の「セバシ」と語源的に同根と捉えることは妥当であると言えよう。[16] つまり、間隔を狭くし間隔を詰めて行く意味として「セム」があることになる。これは現代でも同じで、たとえば、

幼稚園の運動会において、撮影担当のプロのカメラマンが、良い写真を撮ろうとして、園児にセメて行く。

という場合、プロのカメラマンは、園児のことを、責め立てたり攻め立てたりするわけではない。一般の保護者が立ち入ることができないような場所に入り込むことが許されているプロのカメラマンは、園児の真剣な表情を活写し迫真の写真を撮るために、園児との間隔を狭くし間隔を詰めて行くのである。

さて、「セム」のこうした要素を見定めれば、前掲の、

ますらをの　高円山に　迫有者（せめたれば）　里に下りける　むささびぞこれ

（6・一〇二八）

についても、より理解が届くこととなろう。この歌では、「ますらを」が「むささび」との間隔を狭くし間隔を詰めて行ったので、「むささび」は「高円山」で逃げ場が無い状態となり、「里」に下りて来た、と歌われているのである。そして、この一〇二八番歌への右のような理解を媒介とすれば、次の「セム」の他の用例にも、より理解が届くこととなろう。

『万葉集』中の「セム」の用例は、当該歌と右の一〇二八番歌以外では、左の二例である。

荒熊の　住むといふ山の　師歯迫山　責而雖レ問（せめてとふとも）　汝が名は告らじ（11・二六九六）

あしひきの　山沢ゑぐを　摘みに行かむ　日だにも逢はせ　母者責十方（ははせむとも）（11・二七六〇）

双方、厳しく詰問・追及する意味の例であり、より抽象度が上がっていると言えよう。しかし、これも、「ぐっと間隔を狭くし詰めて行き逃げ場が無い状態にする」という理解を基盤として理解すべきであろう。そのように理解することで、詰問・追及の凄みが歌の中で増すこととなる。そのような凄みのある詰問・追及にも負けずに、「お前の名前は決して言いはしないよ。」と歌うのであり（二六九六番歌）、また、「（凄みのある母親の詰問・追及にも負けないで）逢って下さいな。」と歌うのである（二七六〇番歌）。二六九六番歌では、そのように歌うことで、恋の相手への恋心の深さを表明するという、歌の目的が果たされる。また、二七六〇番歌では、そのように歌うことで、自分への恋心の深さを証明してほしいという願い（強請（ねだ）り）が表明されるのである。

続けて、この「セム」について参照されるのは、大坪併治氏『訓点語の研究』[17]の記述である。この大坪著は、岩淵悦太郎氏蔵「願経四分律」一巻（天平十二年の写経）に施されている平安時代極初期[18]の古点についての研究成果を示している。その一巻の料紙十二枚目の十六～十七行目の解読文に、

汝何故不レ（ぞ）避レ（けて）道（を）、共（に）相（ひ）逼斥（セメハサ）、車蓋相突（ツクヤ）邪。

とある。なお、大坪著の「解読文凡例」には、「ヲコト点は平仮名で表はした。」「仮名による訓は片仮名で表はした。」「私意による補読は、平仮名を（　）で包んで示した。」「句読点は、大体に原本の句点に従ひ、現行の「、」「・」「。」を使ひ分けたが、私意によつて加へたところもある。」「反点はすべて後世の形式に改めた。」等と記されている。この「解読文凡例」に拠ってみるに、「逼」に「セメ」という訓が付けられていたことになる。

つまり、この岩淵悦太郎氏蔵「願経四分律」一巻（天平十二年写経）の料紙十二枚目の十六～十七行目には、二台の車が道を譲らずに間隔を詰めて接近し接触している様子が書かれていることになる。そして、こうした様子を表わすのに「逼」という漢字が用いられ、また、こうした様子を表わすのに「セム」というやまとことばが用いられている、と理解できる。この平安時代極初期の訓点資料の用例は、「セム」を「間隔を狭くし間隔を詰めて行く」と理解する本稿の傍証と成り得よう。

ところで、近時の注釈書では、新編日本古典文学全集版『万葉集』が、

迫め―距離を縮めて。

として、旧『全集』の記述（前掲）を改めている。このことも十分に注目されよう。

（二）「とり続き　追ひ来るものは」をめぐって

次に、「とり続き　追ひ来るものは」について考察しよう。

『万葉代匠記』（精撰本）では、

取ツ、キハ打ツ、キナリ。

と述べ、『万葉集全釈』も、

取りは接頭語で、打ちと同じである。

との解釈を示す。しかし、右の注釈書のように、単純に接頭語「うち」と同じとしてしまう処置には従えない。この点、新潮日本古典集成版『万葉集』が指摘することが参照される。『集成』は、「とり続き」に対して、

「とり」はしがみつく意。

と述べる。また、和歌文学大系版『万葉集』も、

トリツツキは互いにくっついた状態で続いているのを言う。

と述べている。

『集成』は「追ひ来るもの」が我が身にしがみつく意に解釈しており、『和歌大系』は我が身に「追ひ来るもの」どうしが互いにくっついている意に解釈しており、違いはある。しかし、双方の理解は、この「とり続き　追ひ来るもの」の表現の部分に極めて粘着質な様相を見出そうとしていることにおいて共通する。

この「粘着質」の様相と、さきほど指摘した「逼め寄り来る」の「セム」の「間隔を狭くし間隔を詰めて行く」意味とを考え合わせれば、当該長歌の「とり続き

追ひ来るものは　百種に　逼め寄り来る」という表現においては、我が身に接近し附着しまとわりつく、そのような「様相」が描き出されている、という理解が導き出される。

四　まとめ

本稿は、「一　はじめに」において述べたように、序文の表現と長歌の表現との関連によってもたらされる表現効果の一端を明らかにすることを目指してきた。それを最後にまとめたい。

当該作品では、まず、序文の「易レ集難レ排」という表現において、計数できないほどに多数のものが、押し離し押し退けようにも集まりまとわりついている、そうした様相が顕わし出されている。そして、序文のそうした様相を、長歌の「概論的」（森本治吉氏『新釈』）と位置付けられる部分のうちの「とり続き　追ひ来るものは百種に　逼め寄り来る」という表現が引き継いでいる。序文の表現を受けるこの表現において、我が身に接近し附着しまとわりつく、そうした様相が、より一層明瞭に描き出されることになるのである。まず、ここに、序文の表現と長歌の表現との関連によってもたらされる表現効果の一端を見出せよう。

そして、こうした様相の提示を基にして、長歌中程の、

蜷の腸　か黒き髪に　いつの間か　霜の降りけむ　紅の（一云「丹のほなす」）　面の上に
いづくゆか　皺が来りし

という表現が存在している。序文の「易レ集難レ排」という表現と長歌の「とり続き追ひ来るものは　百種に　逼め寄り来る」という表現を受ける右の表現では、人間の髪にまとわりついて離れない白髪と、人間の肌に刻まれまとわりついて離れないおびただしい数の皺、という具体物が提示され、より実態的な様相が示される。このことについては、別稿で論じる用意があり、詳しくは別稿に譲りたいが、序文の表現と長歌の表現とのこうした関連によって、世間（よのなか）に生まれそして死に行く定めの人間が逃れることのできない「すべなき」（長歌冒頭）様相が、如実に顕わし出されるわけである。序文の表現と長歌の表現との関連によって一層強められる、こうした表現効果をこの作品は持っている、このことを見定めて、本稿のまとめとしたい。

注

（1）本稿は、当該作品の本文を掲出するにあたり、鶴久氏・森山隆氏編『万葉集』（おうふう）を底本として閲覧可能な写本は複製にて確認し閲覧不可能な写本は『校本万葉集』の記述を参照し本文校訂作業を施している。題詞・漢文序文はその校訂作業を施した原文を掲げ、歌は校訂作業を施した原文を基にして新編日本古典文学全集版『万葉集』（小学館）の書き下しに拠り適宜書き下している。なお、当該作品以外の『万葉集』の用例の掲出においては、題詞や左注の記述は鶴久氏・森山隆氏編『万葉集』（前掲）に拠り、また、歌は新編日本古典文学全集版『万葉集』（前掲）の書き下しに拠り適宜書き下している。

（2）土屋文明氏『旅人と憶良』（一九四二年五月、創元社）

（3）大久保廣行氏「世間の住み難きことを哀しぶる歌」（『セミナー万葉の歌人と作品　第五巻　大伴旅人・山上憶良（二）』、二〇〇〇年九月、和泉書院）

（4）「イメージ」という術語を用いたいところではある。しかし、この「イメージ」という術語は、術語の使用において不用意な論考ではともすると、「雰囲気」程度の意味に用いられていたりもし、その用い方を大変遺憾に思うことが多いのもまた事実である。残念ながらそうした環境におかれてしまっている術語を使用することはあえて避け、ここでは、「様相」という術語を用いることとする。

（5）この『万葉集』巻一・五～六歌の左注は、『万葉集』というテキストに『日本書紀』の記述を引用しようとしており、この「一書」は「『日本書紀』一書」を指すと考えられるが、「一書」は未詳。

（6）日本上代において「皇子の尊」と尊称されるのは、皇太子聖徳太子、皇太子草壁皇子、また、太政大臣まで昇った高市皇子だけである。この挽歌で悼まれている安積皇子は、皇太子でも太政大臣でもなかった。この「安積皇子挽歌」において、皇子への哀惜の念の強さが「皇子の尊」という表現を呼び起こしたことは、周知のことがらである。

（7）『説文解字』の引用は、『説文解字注』（上海古籍出版社）に拠る。

（8）『篆隷万象名義』の引用は、『高山寺古辞書資料第一』（東京大学出版会）に拠る。

（9）観智院本『類聚名義抄』（僧部）の引用は、『天理図書館善本叢書和書之部第三十四巻　類聚名義抄観智院本僧』（天理大学出版部・八木書店）に拠る。

（10）中村元氏・福永光司氏・田村芳朗氏・今野達氏編、一九八九年一二月、岩波書店。

（11）『日本書紀』の引用は、新編日本古典文学全集版『日本書紀』（小学館）に拠る。

（12）観智院本『類聚名義抄』（仏部）の引用は、『天理図書館善本叢書和書之部第三十二巻　類聚名義

抄観智院本佛』（天理大学出版部・八木書店）に拠る。以下同じ。

(13) 金田一春彦氏「国語アクセント史の研究が何に役立つか」（『金田一博士古稀記念言語・民俗論叢』、一九五三年五月、三省堂出版）。なお、金田一春彦氏は、同氏「去声点ではじまる語彙について――本誌第90集所載の望月郁子氏の論文を読んで――」（『国語学』九三、一九七三年六月）において、この法則を、「高起・低起に関する式保存の法則」と名付けている。

(14) 図書寮本『類聚名義抄』の引用は、『図書寮本　類聚名義抄』（勉誠社）に拠る。

(15) 観智院本『類聚名義抄』（法部）の引用は、『天理図書館善本叢書和書之部第三十三巻　類聚名義抄観智院本法』（天理大学出版部・八木書店）に拠る。以下同じ。

(16) この金田一春彦氏の「法則」に対して、「金田一法則を基本的には認めた上で、この法則が破られる場合、いかなる力が働くのかを考え、法則の有効範囲を見定めようとする」論考に、山口佳紀氏「語源とアクセント――いわゆる金田一法則の例外をめぐって――」（『松村明教授古稀記念国語研究論集』、一九八六年一〇月、明治書院）がある。

(17) 大坪併治氏『訓点語の研究』（一九六一年三月、風間書房）

(18) 築島裕氏『平安時代訓點本論考ヲコト點圖假名字體表』（一九八六年一〇月、汲古書院）において、「加点年代」が「平安時代極初期」とされている。

（甲南大学文学部日本語日本文学科教授）